NHKBS 英雄たちの選択

金ケ崎の戦いに見る徳川家康の人間像

*****　家康は常に徳川家の安泰と繁栄を基準に考えた　*****

織田信長、豊臣秀吉、徳川家康の３人が揃って戦ったことで知られるが、「金ヶ崎の退き口の真実」として語られる。この戦は織田信長と朝倉義景との戦闘の一つだが、面白いことに３人の武将だけでなく明智光秀もが同じ戦に参加していた。いわばオールキャストが勢ぞろいした布陣なのだが、信長は一つの情報で真っ先に一目散に退却している……その時に残された武将たちの対応で分かる人間像!!

戦の概要

織田信長が越前(福井県)の朝倉義景を攻撃したところ、同盟関係にあった妹婿の小谷城の浅井家の裏切りに会い、挟撃の危機に瀕した。
そため木下藤吉郎と、信長同盟軍の徳川家康が後衛となって、信長本体が信長勢力地まで帰還するのを援護したのがこの戦い。

敦賀口における金ヶ崎城(敦賀市)攻略自体はすでに成功していたが、浅井家離反の情報を受けてこの地で信長軍の撤退が始まり、木下藤吉郎の軍は最初にこの地を拠点にして撤退戦を行った。

時は 1570 年(永禄 13 年) 4 月 25 日。

金ヶ崎の戦い両軍の構成

織田軍・徳川軍			朝倉軍・浅井軍
織田信長	木下秀吉	朽木元網	朝倉義景
徳川家康	明智光秀		浅井長政
池田勝正	松永久秀		朝倉景恒
30.000 人			24.500 人

そもそも何のための戦だったのか!!

織田・徳川連合軍は３万の軍を率いて京を出陣。織田軍の武将のほか池田勝正・松永久秀といった近畿の武将、公家である日野輝資・飛鳥井雅敦も従軍している。結果から言えば越前遠征に向かったわけだ

が、「越前へて遣」「若さへ罷り越す」とする資料もあり、信長から毛利元就に宛てた書状(毛利家文書)にも「若狭の国武藤を成敗する」文意があることからも、出陣の口実は若狭攻めであった。

但し、当時の若狭国内は将軍足利義昭の甥である、国主の武田元明を朝倉義景が越前に連行して事実上の支配下に置いて以来、足利義昭は若狭武田氏の再興を志向しており、武田家臣団も義昭派と朝倉派に割れていた。このため、**本来この戦いは足利義昭の命を受けた幕府軍による朝倉派の武藤討伐であった。**しかし、朝倉義景が武藤救援に乗り出した結果として、幕府軍の将兵として参加した織田・徳川軍との戦いになった。

*武藤とは……武藤友益で若狭国石山城主。若狭武田氏の家臣で四家老の一人。

戦の経過

４月２５日越前の朝倉義景領に侵攻した織田・徳川軍は、天筒山城を皮切りに敦賀郡の朝倉氏側の城に攻撃をかけ、翌日には金ヶ崎城の朝倉影恒を下す。それに対し朝倉軍は半ば敦賀郡を放棄するように戦線が狭く防御に向いた地形である木ノ芽峠一帯を強化し、防衛体制を整えた。

このように当初は織田方が優勢に合戦を進めていたが、信長の義弟である盟友北近江の浅井長政が裏切ったという情報が入る。はじめ信長は「虚説たるべき(信長公記)」と述べ取り合わなかったが、次々に入る知らせに事実と認めざるを得なくなり、撤退を決意した。織田・徳川軍は越前と北近江からの挟撃を受ける危機に見舞われたのだ。

尚、同年４月２０日付けで従軍中の明智光秀から京の細川藤孝らに宛てた書状には(三宅家文書)には朝倉と浅井の動向を警戒していることが記されていた。それでも、本来の出陣の趣旨が義昭による若狭武田氏への介入であったとすれば、信長から見れば若狭に利害関係のない長政の裏切りは筋違いであったと言える。　撤退するにあたって、信長は金ヶ崎城に木下藤吉郎を入れた。

敵に包囲された秀吉軍を助けるべきか、まずは逃げるべきか(BS 英雄たちの選択)

若狭の武藤氏を打てと足利将軍から命を受けた信長。しかし、武藤の背後に朝倉のいることを知り越前に軍を向け、手筒山城、金ヶ崎城を占領。さらに奥へ兵を進め木ノ芽峠へたどり着く。

ここで、浅井長政が朝倉側についた知らせが届く。浅井が北上してくれば挟み撃ちに会ってしまう。信長は直ちに撤退を決め、しんがりを秀吉に命じて即座に退却してしまう。この時、家康には何も知らせなかったという。一番先に進んでいた家康軍はとりあえず、しんがりの秀吉軍のいる金ヶ崎城を目指して撤退する。ただ金ヶ崎城に防備設備はなかったので、秀吉軍は 10km 戻った国吉城(海に面していて守りやすい)まで行けば安全と判断して退却する。が、その 2km ほど手前で敵に包囲されてしまう。そこへ家康軍が通り掛かる。

さて家康はどうしたら良いか?　戦における退却のしんがりは最も危険が伴う。こんな時はわき目も降らずに逃げ帰るのが無難。身の安全を最優先すべき時であり、このまま通り過ぎたとしても家康に落ち度はない。この時、家康はどうする!!　何と家康は救援に行くことを選択した。

そして、秀吉軍を助け無事に帰還に成功した。全軍が帰還して信長はしんがりを務めた秀吉に褒美を与えた。が、家康には何もなかった。

家康は危険を冒してなぜ秀吉軍を助けに行ったのか

ここに家康の考え方、人間性を見ることが出来る。信長・秀吉・家康の三人を比べる時に、織田がこね羽柴がつきし 天下餅 座りしままに食うは徳川とか、泣かぬなら殺してしまえホトトギス・泣かぬなら鳴かせて見せようホトトギス・泣かぬなら鳴くまで待とうホトトギス、とうたわれたりします。あまり積極的ではない、或いはずる賢いイメージが付きまとうのが徳川家康ですが……ほんとのところはどうなのか?　金ヶ崎の戦いのように、まずは逃げ帰るのが最優先されるときに敢えて秀吉軍を助けに行った。この時家康は何を考えたのか?

学者先生の意見が割れた

ここで出席した学者の皆さんは逃げ帰ると、助けに行くに意見が割れました。逃げ帰るの意見は、ここまで来るのに兵は疲れており危険であると判断。救援するの意見は、この先当分は信長の天下が続くと考えられる中では、自分自身よりも徳川家を守るには信長軍(秀吉軍)を救援することを選んだと思われる。つまり、家康はその場の気持ちだけではなくじっくり考えることが出来る人だった……。その後においても家康らしさが指摘されているのは、信長は打ち破った敵方は女子供まで皆殺しにしているが、家康は敵だった将兵も味方に取り込んでいる。そのことにより敵だった相手の戦法も学び戦力アップを図っているのだ。つまりは、人をうまく使うことにたけていた。組織は人が要であると見抜いていたことに他ならない。